

3449 産経新聞掲載・黄山絶景：状況と心模様②

ジャスチャー、ボディランゲージ、地元の人に聞くのも選択肢、何よりも体感するのが優先。

夜討ち、朝駆け、真っ暗な夜明け前からの行動。

村人も、最初は観光客程度の認識、しかし、私の姿を度々見かける。

気にしだしたが、後半は、気にしてられないとの思いかも。特に害もなさそう。

カメラ持参なので写真家？ 挨拶も先手でやる。

スマイルも忘れない。毎日、昼食用の食料も確保しなければならない。

カメラ3台、背中のバッグ。欧米では、ユーアー、ビッグファイターと言われた。

そのうちに挨拶だけの知人だが数多くできた。日常が面白くなった。

山道の上り下りと広い段差。険しい山道、足元も厳しい。自由に動けるのか、体力の問題。

どうなっているのだろう。若い時より耐久性や体力があるではないか。

日頃からの鍛え方が違ったのか。おかげさまで、行動範囲が拡大、のちに問題発生。

中国の壮大さをあらためて実感できた。

奇松の隙間から垣間見える雲海。その美しさは、人里離れ、山奥にあるからこそその景観。

現実離れの光景である。私は、この現場にいるという事実。

あまりの巨大さに度肝を抜かれるくらい。五感一杯に呼吸し体感。なんという幸せ。

黄山、表と表現したらいいのか、裏と表現したらいいのか、

当時、正面にも、裏にもロープウェイが設備されるようになった。と言うのも、

政治家、鄧小平氏も周恩来氏も登山したと。肖像画が飾られていた。

私は体験と、表も裏もロープウェイも利用したが、自分の足で体感することを優先。凍てた階段を利用してチャレンジ。裏道は並みの道でない、言葉で表せないくらい急である。降りたのはいいのだが、ロープウェイの最終時間に間に合わず、宿に帰れない。

駅の待合室は、吹きさらし、暖房もない。覚悟。始発までなんとかならないか。しばらくして、村人の一人が、片言の日本語でここでは凍死しますよと、声をかけてくれた。異国であり、変なところに連れて行かれたくない。大事になりそうな気配。

人が集まってきた。よそよそしい人もある。行方不明など、当たり前。そんな思いがあった。売店や駅の人からも凍死の危険を言われ、自分の村に宿があるから、行った方がいいと。重装備しているが、実に寒い。

そして、覚悟を決めた。上海など都会はともかく、地方格差の大きい農村。目を見ていると、みなさん純粹である。次々と目に飛び込んでくる初対面の光景には不安、暗い夜道に灯りが無い、宿に案内されるまでの心理状態は不安定。

寝床が一つ。鍵もない。夕食のあたたかい食事がなんとも有難かった。多少の癖はあったが、空腹の中華料理だがますます好きになった。無事に、翌日を迎えた。車でも、かなりの距離である。広大な中国を再確認。

今だから言えるが、現場では不安最高潮。珍体験は、地球ひとり行脚していると数多くある。このあと紹介のアラスカ北極圏・イヌビクでも無事に済んだ今、良き思い出は心の財産。村の人たち、ありがとう。

黄山の画像は、横型縦型、撮影画像を所持している。機会を見て、ご紹介の予定。私の訪問から歳月が経過、環境が激変しているかもしれない。心から、自然との共生を願う。偶然、下記、黄山が紹介されるらしい。私も鑑賞するのが楽しみ。

2018年5月12日（土）午後7時、

**BS朝日 ザ・ドキュメンタリー「世界遺産・黄山紹介」
ドローンなど使用。**